

博士学位論文審査要旨

2020年1月27日

論文題目： 若年者のキャリア選択における多義的曖昧性研究
—「とりあえず志向」の実証的探究

学位申請者： 中嶌 剛

審査委員：

主査： 経済学研究科 教授 八木 匡

副査： 経済学研究科 教授 竹廣 良司

副査： 総合政策科学研究科 教授 中田 喜文

要 旨：

近年、新卒採用者の離職率の高さ等、若年層のキャリア形成が問題となっている。本博士論文は、若年者のキャリア選択の多様化・曖昧化に伴う「とりあえず志向」概念を構築し、キャリア形成のあり方を分析するものである。

本研究の貢献は次のように整理される。本論文では、「とりあえず」公務員という職を選択するという選択行動に、若年層のキャリア形成の本質的な行動特性があると判断し、この「とりあえず」を核となる概念に据えながらキャリア形成パターンを分析している。そのため、論文では「とりあえず」という概念を学術的に定義することからはじめており、それによって言語学および哲学的解釈を「とりあえず」という概念に付与できている。これは、若年層のキャリア形成における特性を本質的なレベルで解釈する上において、有効であると判断している。

次に、「とりあえず」公務員、正社員、フリーターを選択するという行動を、労働経済学的手法を用いながら、実証的に分析している。その結果、とりあえず公務員になるという志向をもつ者は、職業選択における安定志向が強く、将来のキャリア形成の重要なステップになるという意識から生じるとりあえず志向に基づく、将来に対するポジティブな見通しを持っていることが示された。とりあえず正社員を選択した者に関する分析での重要な帰結は、入社後に雇用安定性を感じている人ほど、キャリア開発志向は低いことが示されている。そして、とりあえずフリーターを選択した者に関する分析結果では、消極的に現状を肯定する心理が現状維持バイアスとして働いている可能性が高いことが示されている。

国際比較分析結果の中で特に重要な帰結は、日米韓の3カ国の中で、とりあえず正社員を選択している者に関して、日本のみが能力発揮の不安を有していることが示されている。

これらの結果は、とりあえず志向の選択行動の心理的背景を明確にしていると共に、不確実性が高まりつつある現代の労働市場において、職業選択行動が不確実性の増大によってどのような影響を受けるかを分析する上における重要な学術的示唆を与えていると判断できる。

審査会での意見として、今後は労働需要側である企業の最適行動まで明示的に分析に含め、と

りあえず志向が、労働市場の均衡に対してどのような影響を与えるかについても研究を拡張することが有望であるとの意見があった。

本論文は、労働経済学および計量経済学の学術的な基盤の上で、心理学、行動経済学、言語学、哲学といった広い領域における知見を的確に取り入れた学際的な研究となっており、学術的な価値が高いものと判断できる。よって本論文は、博士（経済学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

学力確認結果の要旨

2020年1月27日

論文題目： 若年者のキャリア選択における多義的曖昧性研究
—「とりあえず志向」の実証的探究

学位申請者： 中嶌 剛

審査委員：

主 査： 経済学研究科 教授 八木 匡

副 査： 経済学研究科 教授 竹廣 良司

副 査： 総合政策科学研究科 教授 中田 喜文

要 旨：

2020年1月25日11時00分から13時00分まで、良心館RY440教室にて学位申請者に対する総合試験を行った。申請者は博士學位論文に関して体系的且つ論理的な報告を行った。上記審査委員からの質疑に対しても、的確な回答をもって本論文の学術的価値を示し、同時に、社会科学的研究方法に関しても、十分な学識と実践力を有していることを証明した。

学位申請者は、本論文を執筆するために数多くの英文の文献をレビューしていることから、博士學位にふさわしい英語能力を持つと判断する。以上のことから、本學位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 若年者のキャリア選択における多義的曖昧性研究
—「とりあえず志向」の実証的探究

氏名： 中寫 剛

要 旨：

本研究の目的は、先行き不透明な社会の中でいかにして自覚的にキャリアを形成できるのかという問題意識から、若年者におけるキャリア選択の多様化・曖昧化に伴う「とりあえず志向」概念を構築・検討し、多義的曖昧性の見地から初期キャリア形成の在り方を定量的に探究することにある。とりわけ、新規学卒時点における「就業（新卒正社員）」「未就業（正社員非希望）」という旧来の二区分ではなく、「とりあえず」「なんとなく」等という曖昧かつ不明確な進路・目的意識に着目し、従来、看過されがちであった曖昧性への対処の違いが職業キャリア意識に及ぼす影響や具体的な選択、さらには曖昧な入社動機の若手社員への雇用管理の在り方を論考する。

通常、長期雇用を前提とした内部労働市場を重視した人材育成システムが存在するわが国では、「とりあえず定職（正社員）」に就くことは労働者にとって経済合理性があるとされる。事実、わが国のキャリア教育現場でも、「自分らしさ」「やりたいかやりたくないか」を追求する米国型のキャリア論に基づく指導がなされており、その仕事をやってみたいかどうかという個人内部における模索や葛藤が曖昧な選択を導くことが指摘されてきた反面、その実態を実証的に明らかにした研究は十分ではなく、こうした曖昧なキャリア選択要因がキャリア形成にどのような影響を及ぼすかについて体系的に示唆した研究も、管見の限り、見当たらない。

実際に、「やりたいこと」が見出せそうにないという悲観的な意識で進路未決定や非正規雇用の状態にある若年者に対する雇用促進施策が十分に機能してきたとは言い難い状況がうかがわれる。進路・目的意識が不明確であるため就労支援の対象から漏れがちであった層にまで射程に入れる本研究では、キャリア選択の問題と社会との接続の在り方を議論するための手がかりを提示することに繋がり、このことは就職困難や不安定状況の継続を個人の問題としてのみならず、社会的問題として具体的な対応策を考える契機となるだろう。

そこで、本研究では、第一に、「とりあえず」概念に基づく進路選択に着目し、「とりあえず志向」概念を構築・検討した。「とりあえず性」というキャリア選択における曖昧性の意義を、労働経済学のみならず、言語学・哲学・社会学・心理学・行動経済学等の先行研究を通して明確にし、「とりあえず＝定職（安定）」という経済合理性の範疇にとどまらず、「とりあえずフリーター（非正規）」「とりあえずニート（未就業）」という非合理的・限定合理的な意思決定過程を視野に入れた把握を試みることで、非合理の中の合理性という視点から曖昧性の多義的側面を明らかにした。

第二に、第一で時間的要素から正負の両側面が明らかとなった「とりあえず志向」を対象カテゴリーごとに検証した。具体的には、「とりあえず公務員」「とりあえず正社員」「とりあえず地元」「とりあえずフリーター」「とりあえず志向の国際比較」の5つのカテゴリーから、肯定的並びに否定的な進路・目的意識として重層的に捉えた。一般に、就職困難者は、明確な就業意識やビジョンを持っていないことが多いとされるが、「とりあえず志向」に着目し、認知に個人差がある曖昧性を考慮に入れつつ、多面的にキャリア形成の在り方を捉える作業は、不確かな状況を前提とする中に自らを位置づけることに他ならず、不安や葛藤の中でもキャリアの自覚や認識に通じる部分を見出せ得る。

第三に、曖昧さの特徴的要因が初期キャリア形成とどのように関連するのかを検証した。曖昧な進路選択に関する合理性判断の是非については、キャリア選択過程を縦断的に捉える視点が不

可欠となる。職業心理学の分野では、非合理的な意思決定の在り方がキャリア成熟に寄与するという論説があるが、既存研究では非合理性の範囲が直感や他者依存に留まっており、一定的かつ不変ではないキャリア形成を時間整合性や限定合理性の分析視座から捉えるためには、本研究で着目する曖昧かつ不鮮明な意思決定の状況まで拡げて考慮する必要があった。

すなわち、曖昧さを意味する「とりあえず志向」をキャリアモデルの中に取り込む作業は、正規就業や新卒正社員を旨とする人々からは否定されがちな面はあるが、一方、中長期的な展望に立った場合、自己キャリアをより身近な存在として捉え直せる可能性があり、また、より良い人生の模索への足掛かりに繋がる点でモデルの改良の一因になると考えられる。こうした「とりあえず志向」の特性を踏まえ、自己キャリアに対する回顧の機会が生活満足度やキャリアビジョンとどのように関連するのかを検証した。

以上の定量分析の基をなすオリジナルの個票データ（総標本数：約 15,000）は、計 10 回に及ぶ独自の質問紙調査および Web 調査により集計したものである。また、「とりあえず志向」に関する自由記述回答に関してテキストマイニング手法を用いた質的分析も併用した。実証分析から得られた主要な知見は以下の通りである。

第一に、「とりあえず定職（安定職）」という曖昧な選択アプローチについて、時間論に関する理論的考察を踏まえて仮説検証した結果、「時間選好性」よりも、むしろ「時間順序の選択性」要因として職業キャリア意識への有意性を確認した。すなわち、「次のステップになる」という意味合いで「とりあえず」就職をする場合、人生の道筋やビジョンを鮮明にする効果が認められた。

第二に、キャリア選択理由が不鮮明なまま、非正規やニート状態である状況を検証した結果、曖昧な進路・目的意識は不活発性との結びつきが強く、現状を引き延ばす姿勢が正社員への移行を遅らせるというロジックから説明可能であった。とりわけ、ロールモデルや身近な相談者の不在並びに惰性的に現状を肯定する意識が、フリーター・ニート状態からの脱却を難しくしていた。加えて、「とりあえずフリーター」「なんとなく」という曖昧な進路選択者ほど、当該不遇期間が重要な自己探索機会・探索期（Super, 1957）になり得ることから、非合理的な状況下における合理的側面の一端を汲み取ることができた。

さらに、正社員以外の状態を消極的に肯定する者は「フリーターでも構わない」という意識が強い反面、「なんとなく」という理由で無業状態にある者は、自己の置かれた状況把握が十分でない場合が多く、前向きなキャリアビジョンに繋がりにくいことから、曖昧な進路・目的意識の程度まで踏まえたより丁寧な雇用促進施策を推進する意義を指摘した。

第三に、曖昧性への対処の違いを検討する目的で日本・米国・韓国 3 カ国の 20~30 代の大卒正社員を国際比較したところ、曖昧な不安の認知尺度は、生存（existence）・関係（relation）・成長（growth）の下位尺度で共通することを確認した。とりわけ、「なんとなく漠然とした不安」という心理が「とりあえず正社員」意識を通じて、キャリア選択が促される共通性を抽出し、明確な目的意識の有無のみに縛られない行動実践の重要性を指摘した。

第四に、企業風土や組織特性に対する評価の違いが、曖昧動機で入社した若手社員の入社後のキャリア開発意識にも有意な差として現れることが明確になった。入社前要因の「とりあえず正社員」意識の中に含まれる主体的要素と入社後に育まれる自発的な職務改善努力とを関連付ける作業は、企業内キャリア形成における有効な組織的支援を検討していくための重要な鍵になることを提示した。

以上の分析結果から、曖昧なキャリア選択に対応した効果的な雇用促進施策のための重要な視点として、「自覚度」「希望度」「限定合理性」の 3 つが導出された。

自覚度では、進路選択における曖昧性の利点を活かすためにキャリア形成に対する当事者性を高める支援が重要になる。本分析では、社会と繋がりを持ちにくい状態にある未就業者（ニート）ほど、ネガティブな思考がネガティブな結果を回避し難い面も看取した。この論点は、高等教育を通じて形成される基礎的技能がもつ職業的意義の問い直しにも関係する。例えば、2000 年代半

ば以降、発達段階に応じた形で登場しているわが国のキャリア教育において、白か黒かの二者択一的な発想ではなく、多様な生き方や働き方の涵養という観点からの教育のあり方の可能性を問うている。本研究より、「とりあえず志向」に基づく柔軟な発想が、自己回顧の機会を提供し、行動・実践を誘発する可能性を高めると示唆された。

希望度では、職業キャリアの不透明性の高まりを背景として、その曖昧さに対応可能な、多様な人材を考慮した企業内外における相談・支援機能の拡充を図ることに着目した。就職困難者にとって、自己効力感と曖昧性選好との間に介在した過度な拘りや悲観的な姿勢が初期キャリア形成の足かせになる可能性が高いことから、企業内では、新しい働き方をベースとした人事の仕組み作りやエンパワーメント促進を意図したキャリア研修の充実が効果的であることを確認した。

限定合理性では、曖昧性への具体的対応として、その曖昧性を好機として肯定的に捉えるための方策を考察し、「自覚度」を高めるとともに「希望」の保持に繋がるような対処の在り方という点でその意義を考察した。本分析では、「とりあえずニート」という非合理的なキャリア選択者が、当該無業期間を自己探索機会として有効活用することにより、自己キャリアに対する期待を高めつつ、行動ステップへと促される状況を把握した。

キャリアをどう生きるかはすべての人に共通する問題である。畢竟、本研究で明らかになった「とりあえず志向」に基づく幾つかの知見は、個々人が自己と対峙する機会をもたらし、各自の視点でキャリア形成のあり方を自覚することによって、自分らしく生きる手がかりなるものを見出す好機として一石を投じた。

(3976 字)